

「大地讃頌」ゆかりの地・浪江から大いなる平和の歌を届けよう

「土の歌」

全曲合唱コンサート

指揮／佐藤 眞
演奏／いわき交響楽団



Shin Sato



Atsuo Ooki

悲劇の詩人・大木惇夫が浪江町に暮らし、

着想した「土の歌」を、

浪江を含む120名の合唱団が歌い、

作曲家・佐藤眞自らが指揮し、

浪江町から発信する。

今、「土の歌」のレガシーが始まる。

入場無料

2018年 9月16日 日

開場 13:30 開演 14:00

浪江町地域スポーツセンター

program

- 第1部 「つゆ」「私と鳥と鈴と」「Pray」「群青」／南相馬ジュニアコーラスアンサンブル(MJC)
- 第2部 創作劇「決を採ります」／福島しあわせ運べるように合唱団
- 第3部 「土の歌」／福島で歌おう「土の歌」合唱団

今なお合唱曲として多くの人々に愛唱される「大地讃頌」。これは、混声合唱曲「土の歌」の最終楽章にあたります。作詞をした詩人・大木惇夫は終戦をはさむ約1年半を、創作と病気療養をかねて浪江町、大堀に住みました。広島県に生まれた詩人が、故郷への原爆投下を知ったのも浪江の地でした。

「土の歌」は、浪江町での運命的な体験をとおして着想され、平和を希求する一大交響曲となって歌い継がれてきました。そして今、未来を託す子どもたちに歌い繋いでいくために、県内3カ所（福島、いわき、南相馬）、東京1カ所で練習に励んできた団員が一堂に会します。

母なる大地のふところに
われら人の子の喜びはある
大地を愛せよ
大地に生きる人の子ら
その立つ土に感謝せよ

平和な大地を
静かな大地を
大地をほめよ
たたえよ 土を
恩寵のゆたかな大地
われら人の子の
大地をほめよ
たたえよ 土を
母なる大地を
たたえよ ほめよ
たたえよ 土を
母なる大地を ああ
たたえよ大地を ああ

混声合唱曲「土の歌」第7楽章「大地讃頌」より

大木惇夫と浪江町

太平洋戦争終戦の1年前に遡る。東京に住む大木が、体調不良の身に東京大空襲は堪えられず、1944年12月、知人との縁で浪江駅前の白木屋旅館に疎開することからすべては始まる。翌年にはさらに大堀村に移り、阿武隈の山並みを遙かにのぞみ、瀬をはやむ高瀬川を真近に眺めながら過ごした1年半が、「土の歌」を着想させる。大木の故郷・広島への原爆投下もここ浪江で知り、第3楽章「死の灰」が生まれる。そして1951年、ゆかりの地大堀村神鳴（かなり）を流れる高瀬川河畔に、大堀在住の松本哲夫氏の発起により詩碑「高瀬川哀吟」（『山の消息』）が建立され、憩いの場として多くの町民が訪れてきた。しかし、2011年3月11日の東日本大震災、東電原発事故以降、帰還困難区域として今も立ち入ることができない。それだけに、全7楽章の合唱カンタータ「土の歌」は、反戦・平和の象徴として今も多くの人々に歌い継がれる。この歌を大木惇夫に霊性を与えた地、浪江町から発信する意義は限りなく大きいだろう。

『忘れられた詩人の伝記 父・大木惇夫の軌跡』（宮田穂栄著・中央公論新社）参照

Profile

大木 惇夫（おおき あつお） 1895-1977

1895（明治28）年、広島県に生まれる。広島商業学校時代に後の師となる北原白秋の詩集『思ひ出』に眩惑され、27歳の時、当時小田原に住む白秋の家を訪れて運命的な出会いを果たし、詩人としての名声を確立する発端となる。第一詩集『風・光・木の葉』は1925（大正14）年、30歳の時に刊行される。以降、『秋に見る夢』『危険信号』『カミツレ之花』など生涯15冊の詩集と数多くの詩論、翻訳、小説などを出版し、詩集『海原にありて歌へる』所収の「戦友別盃の歌」は多くの兵士に愛唱され、後に名優・森繁久彌は自身のアルバムに入れ、演出家・久世光彦もドラマ化するほど愛されてきた。だが、戦争協力者という文壇評価のまま1977（昭和52）年、不遇・不運の生涯を閉じた。

佐藤 眞（さとう しん） 1938-

1938（昭和18）年、茨城県に生まれる。東京藝大専攻科2年生の時に「交響曲第1番」が1961年日本音楽コンクール第1位入賞と特別作曲賞を受賞、同年の混声合唱組曲「蔵王」、翌年のカンタータ「土の歌」等で作曲家としてデビューした。ゆたかな音楽性が正統的な優れた作曲技法により息づく作品は明るく力強い。合唱作品はアマチュア合唱団にも広く愛好され、作品も多い。管弦楽作品には「管弦楽のための協奏曲」（1987）などでも新たな語法を追及している。ピアノ協奏曲をはじめピアノ作品も数多く、オペラも「雪女風土記」など5作品があり、地方オペラの興隆にも力を注いでいる。東京藝大教授として後進の育成も務めた。